

与謝野門下東京新詩社歌人田村黄昏私家版歌集『黄昏』について

宮本和歌子

はじめに

明治末期の『明星』や『スバル』に東京新詩社の一員として度々歌を発表した田村黄昏、本名田村豊彦（明治十九年（一八八六）二月二十日～昭和八年（一九三三）十一月九日）は明治三十九年（一九〇六）春、満二十歳で与謝野寛率いる東京新詩社に入社、東京帝国大学在籍中の明治四十三年（一九一〇）には森鷗外や高村光太郎、吉井勇らと並び毎号のように『スバル』誌上を賑わし、四月、六月、八月、十一月の各号に合計百三十五首を発表して新進歌人として頭角を表していた。その華々しい様子は、『万造寺斎選集』第9巻序文で堀口大学により、「万造寺斎はその頃の傾きかけた新詩社の社運を背負って活躍した、若き短歌実作者の第一人者の観があつた。／ 他にも斎と同じく東京帝大の最上級またはそれに近いあたりに席を置いて、短歌に才を競つた二子があつた。田村黄昏、藤岡長和の二人だ。お互に爾汝相ゆるす仲らしく、この帝大三羽鳥の花やかな存在は、中学を卒えて田舎から出て来たばかりの、十八才の少年の目には羨しい限りのものに見えた」と記されている。

与謝野晶子は自著『歌の作りやう』（大正四年（一九一五）十二月金尾文淵堂）で、「私の尊敬して居る現代の詩人の中で、与謝野寛、高村光太郎、平野万里、茅野蕭蕭、吉井勇、石川啄木、北原白秋、田村黄昏、万造寺斎、間島磐雄、香川不抱の諸氏は曾て私が一所に歌を詠み合つた人達ですが、私は此人達が（中略）現代を代表する程の佳作を短時間に詠まれたことを知つて居ます」と、尊敬する現代歌人の一人として夫の与謝野寛や高村光太郎、吉井勇と並び田村黄昏を挙げている。だが、豊彦は東京帝国大学を卒業した明治四十五・大正元年（一九一〇）以降歌の発表をほとんどしなくなり、昭和八年（一九三三）十一月九日享年四十八での早い死は、昭和九年（一九三四）一月『冬柏』第五巻第二号で「昨年十一月に新詩社の旧友田村黄昏（名は豊彦）氏が没せられた。氏は高等学校時代より同学の藤岡長和氏と共に『明星』や『スバル』へ歌を出された人である」と伝えられたのみであつた。

帝大三羽鳥のうち、万造寺斎は『歌集 憧憬と漂泊』（大正十三年（一九二四）六月万造寺斎刊）や『蒼波集』（昭和七年（一九三二）七月街道社）など存命中に刊行された歌集が複数

あり没後にも年譜付きの選集が刊行されているし、藤岡長和は佐賀県や和歌山県の知事を歴任したことからある程度足跡も判明していたが、作品集が公刊されることがないまま四十代で死去した田村黄昏は生没年はじめ生前の足跡も不明点が多く、現在では忘れられつつある歌人であった。そうした中で、豊彦遺族の協力により田村黄昏や与謝野寛の未発表歌を含む数々の資料と談話の提供を受けて略年譜を作成し、『明星』や『スバル』に多くの歌を発表したのは東京帝国大学在学中の東京居住期間であって過去の明星派歌人研究で在大阪歌人とされていたのは適切ではないことを明らかにし、拙稿「与謝野門下新詩社歌人・田村黄昏について——略年譜の作成、田村黄昏ならびに与謝野寛未発表歌の紹介——」⁽³⁾に略年譜を掲載した。

明治十九年（一八八六）二月二十日という豊彦の生年月日は、彼と同時期に東京新詩社で活動し生前ほとんど注目を浴びることなく亡くなった石川啄木と全く同一である。私生児として生まれ、中学校を中退し、生涯貧苦に喘いだ石川啄木に対し、豊彦は両親の揃った裕福な家庭に生まれて第三高等学校から東京帝国大学を卒業し、会社員となつて以降も余裕のある暮らしを送っていた。豊彦は啄木のように必死で生活費を稼ぐ必要がなかったせいか生前自身の歌を刊行しようと必死に売り込むことはしていなかったようであるが、いつか歌集を刊行したいという希望を持つてはいたらしく、雑誌へ歌を発表しなくなつてからも作歌と詠歌の自選作業が続けていた。生前の歌集刊行は実現しなかったが、豊彦の死後、豊彦の歌稿類から四百四十一首の歌を選出、収録した私家版歌集『黄昏』が二番目の妻・姚子（たよこ）と第三高等学校時代からの友人・小牧茂彦によつて

刊行され、生前交流のあつた者に配布されている。

年代順に歌を収録した『黄昏』を見ると、新詩社仲間の影響を受けてか若さゆえの苦悩や色街の光景を詠んだ歌が多かつた豊彦の歌であるが、昭和四年（一九二九）第一子誕生以降に歌風が一変し、我が子への愛情に満ちた歌が多くなっている。日常生活の折々に感じる我が子への愛をテーマにした歌は東京新詩社を主宰していた与謝野夫妻もあまり詠んでいないが、堀口大学によつて豊彦と同じ帝大三羽鳥に数えられた万造寺斉も、与謝野夫妻から距離を置くようになってから刊行した歌集に多数残している⁽⁴⁾。与謝野晶子に高く評価されながらも表立って活動した期間の短かつた田村黄昏の歌風の変遷と作歌活動を解明するための第一段階として、本稿では貴重な未発表歌を多数含んだ田村黄昏私家版歌集『黄昏』所収歌の選出基準、既発表歌と未発表歌の割合や異同を調査していく。

一 『黄昏』草稿と小牧茂彦

現時点で発表が確認されている田村豊彦の歌は、黄昏という号で詠んだ八首が明治三十九年（一九〇六）十一月東京新詩社『明星』午歳第十一号に掲載されたのを皮切りに明治四十四年（一九一一）まで東京新詩社『明星』に五回、昂発行所『スバル』に七回掲載されている他、小宮水心『応用新案 漢詩と新体詩』（明治四十年（一九〇七）三月積善館）に教材として一首、明治四十五年（一九一二）以降は大正三年（一九一四）の我等発行所『我等』⁽⁵⁾、大正十一年（一九二二）の明星発行所『明星』、昭和十三年（一九三八）の改造社編『新万葉集』第

写真一（遺族提供）

（非公開）

（非公開）

写真二（遺族提供）

写真三（遺族提供）

（非公開）

五卷（昭和十三年（一九三八）五月改造社）で新たな歌の掲載を確認できるのみである。しかし、豊彦の遺族宅には多数の未発表歌を含む手製の田村黄昏歌集『黄昏 亡夫豊彦偲び草』（写真一）が保存されていた。

妻の姚子による昭和十四年（一九三九）十一月九日付の『黄昏』跋文によれば、同書は豊彦七回忌に際して遺された詠草を畏友小牧茂彦に選んでもらったものだという。明治三十八年（一九〇五）から明治四十三年（一九一〇）までの年毎の詠歌、明治四十四年（一九一）以降と昭和三年（一九二八）から昭和五年（一九三〇）までの年毎の詠歌が一頁から四十六頁までに収録されている他（写真二）、豊彦の肖像写真と直筆短冊からの書影を載せた口絵（写真三）、二頁分の小牧茂彦の序文と半頁分の姚子の跋文で構成されている。小牧茂彦の序文「序に代へて」は、「明治三十六年九月、其時分の第三高等学校の寄宿舎の北寮第三室に顔を合せた中に垢抜けのした学生が一人居た。夫れが田村君であつた」と始まり、他の仲間と一緒に雅星会という和歌の会を結成したことを回想している。『黄昏』所収歌選出については、「私は迷つた。之でいいと云ふ自信もなかつた。（中略）もつとしつかりした歌人

に見て貰ふのが本当とも思つた。私の迷ひを田村君の靈は憫笑してゐる事であらう。又私の選び方に苦笑してゐることであらう。まさか怒られはすまいと思ふ」と豊彦への愛情に満ちた文で説明し、筆を置いている。

『第三高等学校一覧 明治三十五年九月起明治三十六年八月止』^(五)には明治三十六年（一九〇三）九月三十日時点での第三高等学校在籍者氏名が記載され、大学予科生徒第一部第一年級法科甲四十名の中に東京府士族田村豊彦、東京府士族小牧茂彦兩名の名前がある。人事興信所編『人事興信録』第八版（昭和三年（一九二八）七月

人事興信所）によれば小牧は豊彦より年長の明治十七年（一八八四）七月生まれで、豊彦十七歳、小牧十九歳のときに第三高等学校の級も寄宿室も同じ仲間として出会ったようだ（写真四）。『第三

写真四（遺族提供。最後列左から四番目田村豊彦、中列右から四番目小牧茂彦。）

（非公開）

高等学校一覧 明治三十七年九月起明治三十八年八月止』には第一部第三年級法科甲に豊彦の名が、第一部第二年級法科甲に小牧の名があり^(六)、留年をした小牧は明治三十九年（一九〇六）七月に第三高等学校大学予科を卒業した豊彦^(七)より一年遅れて第三高等学校大学予科第一部文科を卒業した^(八)後、明治四十年（一九〇七）に豊彦と揃つて東京帝国大学法科大学政治学科に入学している^(九)。小牧は明治四十四年（一九一一）七月に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業しているが^(十)、豊彦は明治四十一年（一九〇八）九月に新設された法科大学経済学科に入学し直し^(十一)、小牧の卒業から一年三ヶ月遅れて大正元年（一九一二）十月東京帝国大学法科大学経済学科を卒業している^(十二)。

豊彦の遺族宅には、明治三十九年（一九〇六）八月八日東京の実家に帰省中の小牧が書いたと推定される絵葉書^(十三)や大正三年（一九一四）六月五日の消印が押された小牧からの絵葉書が残っており、第三高等学校卒業後も両者の交流が続いていたことがわかる。「序に代へて」には、「晩年は才人の悌は無くなつて平凡な一会社員の観があつた。会社を止めて彼は実にいゝいお父さんでもあつた。偶々私の処へ来ても始から終まで子供のことばかり話して帰つてゆくこともあつた」と、豊彦の晩年の姿が記されている。

豊彦の没後に刊行された前掲『新万葉集』第五巻には、豊彦存命中の発表が確認されていない「夜の汽車わが生くる世のよろこびをみななせて去るごとく淋しき」、「爆弾の裂くる音よりおそろしきものにぞ次の一言を待つ」の二首が収録されている。同書の「作者略歴」において、「田村黄昏 本名豊彦。明治十

九年二月東京に生る。大正元年九月東京帝大法科大学経済学科卒業。大正五年大阪織物株式会社入社、昭和六年退社。昭和八年十月兵庫県武庫郡甲子園に逝去。三高時代より作歌に入り、大正前後は「明星」に抛り、其後「スバル」にも発表す^(十四)と豊彦の経歴が述べられている。他方、遺族宅に保管されていた小牧茂彦による『黄昏』序文案には、「田村豊彦君は明治十九年二月二十日東京に生れ、(中略)大正元年九月、東京帝国大学法科大学経済学科を卒業した。／大正五年九月大阪織物株式会社に入り、倉庫係、庶務係、用度主任、会計主任に歴任して、十五年の間会社勤続して居たが、事情ありて昭和六年十一月退社した。爾後閑地に在つたが昭和九年春肋膜炎を病みてより急に元氣衰へ、その秋腎臓炎より尿毒病を併発し遂に十一月九日に逝去した」と記されている。豊彦の没年月日を『新万葉集』では昭和八年(一九三三)十月没、小牧の序文案では昭和九年(一九三四)十一月没とし双方異なる誤りを記載しているが、大正元年(一九一二)十月の大学卒業を同年九月と誤っている点、大正十一年(一九二二)四月『帝国大学出身録』では大阪とある豊彦の出生地^(十五)を東京としている点で『新万葉集』と『黄昏』序文案は一致している。豊彦の死後、『新万葉集』への収録を打診された妻の姚子から依頼された小牧が豊彦の遺稿から二首を選び、豊彦の略歴を『新万葉集』収録用に提供したと推測される。

豊彦と小牧茂彦は明治三十六年(一九〇三)九月の出会い以降豊彦の死まで、実に三十年來の友人であった。小牧は「大学を卒業して会社員となつてからは自然歌の方は不勉強になつてゐたが、そのあとずつと歌を作つてゐたならと惜しい気がする。

云はばその頃が一転機の頃であつて青年の客氣の鎮靜すると共に、才氣喚発と云つたやうな華やかさを失ひ自分で少し氣を腐らしたのではないかと思ふが、それは詩想の涸渇でなくして円熟に一転機する時代でもあつたのだ。と云ふのはその後折ふしに作つた歌が却つて仲々によいものがあるやうに思はれるからである」と、かつて和歌の同志だつただけあり「序に代へて」で豊彦の作風を的確に分析しており、歌人田村黄昏を最もよく理解する評論家でもあつたといえる。さらに「元來君の歌は千数百首に上つてゐるがその多くは習作と見られ、「君は生前第一次と第二次に亘つてその初期時代の歌を自選してゐるので大体それに依」つて『黄昏』収録の歌を選出したと説明している他、「此集の中には「明星」又はその後身の「昴」に載つたものが大部分を占めてゐる。そうでないのは初めの方の四五十首と終りの方の十数首位のものではないかと思ふ」とも記している。遺族宅に残つていた『黄昏』草稿のうち「選の経過説明」と題された原稿用紙^(十六)には「序に代へて」より一層詳しい選出の経緯が記され、「一、此の内第二十六頁までは大体全部を網羅して第一次自選、第二次自選あり。／第二十七頁以降は全部を網羅しありや否や不明、又作歌の年代順も不明、明星、すばる等との対照を待つ。／一、第二十六頁までは明治四十三年頃迄の歌(全部あるべし)一千二百五十首より第一次自選として四百四十八首を選び更に又百七十三首程を第二次自選とせる如し大体之に依る。／(中略)／一、第二十七頁以下はノートあるものの大部分を書き上げ削除したるものは少数に過ぎず」とあり、豊彦が自選に含めなかつた歌でも小牧の判断で拾い上げ『黄昏』に収録したものがあることも記されている。余白に

は、選出に際して小牧が用いた豊彦の歌稿類（写真五）に関する次のようなメモ書きがある。

- No. 1ハ 明治三十六年以下四十三年追録
- No. 2ハ 以上の第一次自選及補足
- No. 3ハ 其後ノ作及No. 1及No. 2ノ第二次選
- No. 4ハ 同様第二次選及其後ノ作（昭和三年よりあり）
- No. 5 前後の一首
- No. 6 No. 4を書き写したりと思はるゝもの

写真五（遺族提供。小牧がNo. 2に分類した手帳のページ。一首目横に鉛筆書きで黄12・2が書かれている他、八首目に黄14・2がある。）

（非公開）

『黄昏』所収歌は小牧茂彦の選出というものの、大部分は

生前に豊彦が選出していたものに依拠し、自選に漏れたものからも適宜小牧が選出したものである。

『黄昏』所収歌は全部で四百四十一首^{（十七）}、一方豊彦が生前に文芸雑誌に発表した歌は三百四十首、教材として『応用新案漢詩と新体詩』に収録された一首と没後『新万葉集』に収められた二首を加えると既発表歌の総数は三百七首である。既発表歌が全て『黄昏』に収録されているとしても『黄昏』収録の百三十四首が未発表歌ということになり、未発表歌は「初めの方の四五十首と終りの方の十数首位のものではないかと思ふ」とする小牧の推測と大幅に異なる。次章では、『黄昏』所収歌の既発表歌、未発表歌の数を具体的に調査する。

二 未発表歌の割合、既発表歌との異同

『黄昏』には、四百四十一首の歌が収録されている。内訳は明治三十八年（一九〇五）九首、明治三十九年（一九〇六）二十三首、明治四十年（一九〇七）十四首、明治四十一年（一九〇八）六十二首、明治四十二年（一九〇九）十二首、明治四十三年（一九一〇）九十六首、明治四十四年（一九一一）以降百八十三首、昭和三年（一九二八）八首、昭和四年（一九二九）十一首、昭和五年（一九三〇）二十三首である。

現在判明している豊彦の既発表歌三百七首が掲載された媒体に番号を付して、掲載歌数のうち『黄昏』と重複している歌の数を記した。

①明治三十九年（一九〇六）十一月『明星』午歳第十一号

八首中一首

- ②明治三十九年（一九〇六）十二月『明星』午歳第十二号
七首中〇首
- ③明治四十年（一九〇七）三月『応用新案 漢詩と新体詩』
一首中一首
- ④明治四十年（一九〇七）九月『明星』未歳第九号
十二首中四首
- ⑤明治四十一年（一九〇八）三月『明星』申歳第三号
二十九首中十三首
- ⑥明治四十一年（一九〇八）十一月『明星』満百号記念終刊号
三十八首中二十首
- ⑦明治四十二年（一九〇九）十月『スバル』第十号
十八首中七首
- ⑧明治四十三年（一九一〇）四月『スバル』第二年第四号
二十四首中十六首
- ⑨明治四十三年（一九一〇）六月『スバル』第二年第六号
三十六首中二十七首
- ⑩明治四十三年（一九一〇）八月『スバル』第二年第八号
二十一首中九首
- ⑪明治四十三年（一九一〇）十一月『スバル』第二年第十一号
十四首中四十一首
- ⑫明治四十四年（一九一一）二月『スバル』第三年第二号
九首中二首
- ⑬明治四十四年（一九一一）八月『スバル』第三年第八号
二十八首中二十八首
- ⑭大正三年（一九一四）八月『我等』第一年第八号
二首中二首

- ⑮大正十一年（一九二二）一月『明星』第一巻第三号
十八首中十七首
- ⑯昭和十三年（一九三八）五月『新万葉集』第五巻
二首中二首
- 次に、『黄昏』収録の歌について作歌年毎の未発表歌数、未発表歌の占めるパーセンテージを挙げる（千分）。
- 明治三十八年（一九〇五）
九首中九首
- 明治三十九年（一九〇六）
二十三首中二十首
- 明治四十年（一九〇七）
十四首中十首
- 明治四十一年（一九〇八）
六十二首中二十五首
- 明治四十二年（一九〇九）
十二首中八首
- 明治四十三年（一九一〇）
九十六首中三首
- 明治四十四年（一九一一）以降
百八十三首中百三十四首
- 昭和三年（一九二八）
八首中八首
- 昭和四年（一九二九）
十一首中十一首
- 昭和五年（一九三〇）
二十三首中二十三首
- 100 %
- 100 %
- 100 %
- 73.2 %
- 3.1 %
- 66.7 %
- 40.3 %
- 71.4 %
- 87.0 %
- 100 %

『スバル』に年間を通して四回掲載された明治四十三年（一九一〇）分は八十七首が既発表で未発表歌数はわずかに九首だが、新詩社入社前である明治三十八年（一九〇五）^{（十）}と表立った活動をしなくなった昭和期の作品は全て未発表である。既発表歌三百七首のうち百十七首が『黄昏』に収録されていない歌、百九十首が『黄昏』に収録されている歌で、既発表歌の約61.9%が『黄昏』に収録されていることになる。他方、『黄昏』に収録されている既発表歌百九十首は『黄昏』所収歌数全体の約43.1%に相当し、『黄昏』所収の未発表歌は二百五十一首、全体の約56.9%と既発表歌より多い。「此集の中には『明星』又はその後身の「昴」に載つたものが大部分を占めてゐる。そうでないのは初めの方の四五十首と終りの方の十数首位のものではないかと思ふ」と小牧茂彦が「序に代へて」で記しているのに反し、半数以上が未発表の歌である。既発表の歌でも、漢字をひらがなに変更したり表現を若干変更したり語句の順を入れ替えたりと軽微な修正が施されたものもあれば、歌意が変わるほど大きく手が加えられているものもある。以下では、既発表歌と『黄昏』所収歌の異同を詳しく掲げていく。

・発表媒体名や巻号の表記は略して前出の番号①から⑭で表し、掲載された歌のうち『黄昏』所収歌と異同のある歌の数を記す。ただし、誤植に由来すると思われる異同は数に含めない。

・既発表歌は各掲載物毎に頁の上段右から左へ、下段右から左へと全ての歌に通し番号を振り、例えば明治四十一年（一九〇八）三月『明星』に田村黄昏の歌八首目として掲載された

歌であれば⑤・⑧と表し、『黄昏』所収歌との異同箇所傍線を付す。

・『黄昏』所収歌は全てに1から441までの通し番号を振り掲載頁も付記し、通し番号48の6頁掲載の歌であれば黄48・6と表し、既発表歌との異同箇所傍線を付す。

・用いられた漢字や送り仮名、表記文字種の異同のみの歌は数に含めるがここでは示さない。ただし、同訓異字はそれを示す。

①一首中一首

①・2

砕けたる土器のいろ／＼里川の水底涼し秋の水ゆく
砕けたる土器のいろいろ里川の水底すずし初秋の朝

黄29・4

②七首中〇首

③一首中一首

③・1

薄月夜山はしづかに大聖が涅槃のさまに横はりけり
薄月夜山は静かに大聖の涅槃のさまに横はりけり

黄14・2

④四首中四首

④・1

年なかば夜のつづくてふ国の夜の明けぬることし君と別れぬ
年なかば夜のつづくてふ国の夜の明けぬること

黄36・5

とし君を忘れぬ

④ 1 4

彼のをみなつぶやくとき山蜂のにくき羽音を竹ごしに聞く

黄 41 1 5

彼の女呟くごとき山蜂のゆうとき羽音聞きて昼寝る

④ 1 5

夜の時計まくらの下に音を曳くあないづこより我血したるる

黄 39 1 5

夜の時計枕の下に音を曳くあないづこより我が血したたる

④ 1 7

別れむと言へるころは日を見ざる林に杳を入るるにも似ぬ

黄 45 1 5

別れむと云へるころは日を見ざる林に杳を入るるにも似て

⑤ 十三首中十二首

22 ⑤ 23

⑤ 25

⑤ 3

⑤ 6

⑤ 16

⑤ 20

⑤ 28

同

⑤ 2

王者なきこは荒国か塵あがり大風ふきて日ぞ曇りたる

黄 50 1 6

ふと王者無き国おもふ大風の巷の塵に日の朧なる

⑤ 1 5

音のかぎり訴へ泣くとき獣ともやや媚ぶると

き少女とも見ゆ

黄 47 1 6

音のかぎり訴へ泣くとき獣とも立ちわぶるとき女とも見ゆ

⑤ 1 8

夜と昼のわちちもあらずとろに痴れて夢みる若さ残れり

黄 48 1 6

夜昼のわちちもあらずとろに痴れて夢追ふ若さ残れり

⑥ 二十首中十六首

⑥ 35

⑥ 38

は文字種、漢字の異同

⑥ 2

⑥ 3

⑥ 20

⑥ 25

⑥ 26

⑥ 1 5

みな失せてひとり眇の智の少女からくもあるを愛でしれて居り

黄 68 1 8

みな失せてひとり眇の智の少女からくもあるを愛で痴れて居ぬ

⑥ 1 9

にはかにもどよめくなかに蟋蟀のちちるとなきぬくれがたの街

黄 72 1 8

雑然とどよめる中に蟋蟀のちちると鳴く音すぐれがたの町

⑥ 1 11

紅き蟹はさみを振ればおもむろによけて歩みぬ長靴の足

黄 76 1 9

紅き蟹鉾をふればおもむろに長靴の足よけて歩みぬ

⑥ 13

痛ましき病とさむきおもかげと手を取りきた

るわれの勝たむや

黄 78 9

痛ましき病と寒きおもかげと手を取りて来ぬ

われの勝たむや

⑥ 19

疲れたる骨牌をあそぶ手にあるは我としるせ

る赤色の札

黄 81 9

疲れたる骨牌をあそぶ手にあるは我と云ふ字

の赤色の札

⑥ 23

秋の水いづくまでゆく知らねども三味線ひい

て舟下りゆく

黄 84 9

秋の水いづくまでゆく知らねども三味線ひい

て舟流れゆく

⑥ 31

ななつ星出水の町に舟うけて火を振るうへに

長くかりぬ

黄 88 10

七つ星火事見る屋根の人影の黒きが上に長く

かりぬ

⑥ 32

三五人焚火をめぐるその上に女人のごとく月

の青みぬ

黄 89 10

三五人焚火をめぐるその上に女人のごとき月

青みたり

⑥ 38

君泣くをわれ慰むる言葉なし火桶の炭よな眺

黄 92 10

ねそいたく

君嘆くわれはた嘆くこの間火桶の炭のいたく

⑦ 七首中七首
同)

⑦ 4

⑦ 5

⑦ 17

⑦ 18 は文字種の異

⑦ 6

さかしまに徳利を振れどかの甘き夜の魔薬の

黄 118 13

さかしまに徳利を振れど前の夜の魔薬の匂う

ごき来らず

⑦ 10

新しく思ふは易し然れども忘るることのいと

黄 119 13

あたらしく思ふは易しかれども忘るること

のいとも難かり

⑦ 16

霜月の三日の夕ぐれ瀬戸の海しぐるる時に眼

黄 100 11

霜月の三日の夕ぐれ瀬戸の海しぐるる中に眼

とち玉ひぬ

⑧ 十六首中十一首

⑧ 1

⑧ 3

⑧ 15

⑧ 17

⑧ 21

⑧ 22、⑧ 24 は表記文字種の異同)

⑧ 2

遊ぶ子

黄 124 14

燕のごとくに下谷浅草の紅き埃のなかに遊ぶ

子

⑧
16

歌うたひ鏡にむかふ時の眼のあきらかなるを
星によそへむ

黄
124
14

歌うたひ鏡にむかふ時の眼の明らかなるを何
にたぐへむ

⑧
7

よろこびは万年筆を流れいで薄むらさきに染
めぬ君が名

黄
129
14

よろこびは万年筆を流れいでうすむらさきに
君が名を染む

⑧
13

むかひぬ涙を流す蠟燭と石炭よりも寒き瞳
と

黄
131
14

むかひ居て涙を流す蠟燭と石炭よりも黒き瞳
と

⑨
27
首中十六首

⑨
1、⑨
4、⑨
6、⑨
10、⑨
33は表記

文字種、送り仮名の異同)

⑨
8

わかき豚ものに足らへるうれしさの鼻を鳴ら
して埒を走れり

黄
146
16

若き豚ものに足らへるよろこびの鼻を鳴らし
て埒を走れり

⑨
18

夕されば所在のなさに筆をとる不換紙幣に似

たる消息

黄
152
16

夕ぐれの所在のなさに筆をとる不換紙幣に似
たる消息

⑨
19

雨のおと昔のむかし滅びたる楽器のいにと触
るかなしき

黄
153
17

雨の音むかしの昔滅びたる楽器のいにと触る
る淋しさ

⑨
31

わが七日なかの六日は灰色の壁と煉瓦の赤に
かこまる

黄
162
17

わが七日中の六日は灰色の壁をレンガの赤に
かこまる

⑨
34

なやましき電車の音の鋸はわが神経の薄板を
ひく

黄
164
18

悩ましく電車の音の鋸はわが神経の薄板をひ
く

⑩
九首中八首

⑩
1、⑩
3、⑩
12、⑩
14、⑩
17、⑩

18は表記文字種の異同)

⑩
2

五月雨は病みたるわれのころろをも泥海をも
てみたさんとする

黄
168
18

五月雨は病みたるわれの心にも泥の海など流
さむとする

⑩
5

ふらふらと川端にきてさびしげに杭にとま
れる鳥など見る

黄
170
18

ふらふらと川端に出てさびしげに杭にとま
れる鴉など見る

⑪ 四十一首中三十一首

⑪ 33、⑪ 34、⑪ 36、⑪ 38、⑪ 39、⑪ 42、⑪ 48、
⑪ 11、⑪ 13、⑪ 14、⑪ 16、⑪ 20、⑪ 27、⑪ 30、
⑪ 2、⑪ 3、⑪ 4、⑪ 10、

49は表記文字種の異同)

⑪
1

酒盃は事あるたびに湛へらる彼の塔上の鐘鳴
らすこと

黄
176
19

盃は事あるたびに湛へらる彼の塔上の鐘の鳴
ること

⑪
6

かなしげに酒盃を嘯むこの男滅べる国の歌を
うたひて

黄
181
19

悲しげに盃を嘯むかの男滅べる国の歌をうた
ひて

⑪
12

格子戸に懷手する女等も立ちて眺むる秋風の
町

黄
186
20

格子戸に懷手する女など立ちて眺むる秋風
の町

⑪
15

夕されば老ひたる父のわが肩を叩くがとき
秋の風吹く

黄
189
20

夕されば老ひたる父のわが肩を叩くが如く秋
の風吹く

⑪
19

つと入れば天の横雲見ることく衣の乱れし君
が部屋かな

黄
192
20

つと入れば天の横雲見ることく衣の乱るる中
に君居る

⑪
22

秋の風肩に流るる黒髪も駒の尾のごとさらさ
らと鳴る

黄
195
22

秋の風肩に流るる黒髪を駒の尾のごとさらさ
らと吹く

⑪
25

かの君の弁へもなき涙にも誘はれ易くなり
けるかな

黄
197
21

なにとなく弁へもなき涙にも誘はれ易き秋の
ころろか

⑪
35

厄日の船路に飛べる鳥のごと眼に遮りし君な
りしかな

黄
203
22

厄日の船路に飛べる鳥のごと眼にさやりくる
女なるかな

⑪
37

灰色の夕のみなと音もなく入りくる船の黄龍
の旗

黄
205
22

灰色の夕の港音もなく入りくる船の黄色なる

旗

⑪ 41

黄 208 22

⑪ 51

黄 214 23

⑪ 54

黄 216 23

⑫ 二首中二首

⑫ 5

黄 217 23

⑫ 6

黄 305 32

くろがねの檻のなかより青空の一片を見て鳴ける隼
くろがねの檻の中にて青空の一片を見て鳴ける隼

秋きたるあまたたびなる君が文すこし間遠におもはるる頃
秋来るあまたたびなる消息の少し間遠に思はるる頃

ひとり寝の寝起の袖をおびやかす風のやうなる君がもの云ひ
ひとり寝の寝起の袖をおびやかす風のやうなり君がもの云ひ

窓にいで老いたる猫のうちあふぐ眼にもかなしき正月の雨
窓に出で老ひたる猫のそらを見る眼にも悲しき正月の雨

ひらひらといと不可思議に猫の耳うごけるときに初雷の鳴る

ひらひらと子猫の耳のうごくとき電燈ともし

夜の国となる

⑬二十八首中十六首 (⑬ 3、⑬ 4、⑬ 9、⑬ 10、⑬ 13、⑬ 15、⑬ 16、⑬ 22、⑬ 23、⑬ 25、⑬ 26は表記文字種、漢字の異同)

⑬ 6

黄 223 24

⑬ 11

黄 230 24

⑬ 17

黄 235 25

⑬ 19

黄 237 25

⑬ 20

ものうくも見世物小屋の檻にねしけものごとときわが病かな
病また見世物小屋の檻に寝るけものごときわれを見いだす

燐寸すりて燃え尽くるまで見入りたる気分をあはれやりどころなし
燐寸すりて燃えつくるまで見入りたる気分をあはれやりどころなし

猫の背に火花をたつところもちすこし鎮まる明けがたの雨
猫の背に火花を立つところもちすこし鎮まるあけくれの雨

硫酸の青き瓶よりかげろふのむらがりるのぼり初夏となる
硫酸の青き瓶よりかげろふのむらがりるのぼり初夏となる

ものうげに風こそわたれ若人のうすき髻より

黄 238
25

遠き雲より
もの憂げに風こそわたれ若人の薄き鬚より遠
き雲より

⑭二首中二首

⑭ 1

⑭ 2 は文字種の異同
胃の重きねざめごこちに向日葵の黄色のをど
り狂ふ昼かな

黄 312
33

胃の重き寝ざめごこちに向日葵の黄色がおど
り狂ふ昼かな

⑮十七首中十四首

⑮ 9

⑮ 4

⑮ 11

は表記文字種、送り仮名の異同

⑮ 1

⑮ 2

⑮ 3

⑮ 5

⑮ 8

黄 370
38

はかなくも生れ来りてはかなくも死にゆくこ
とし夜の汽車に乗る
はかなくも生れ来りてはかなくも死にゆくこ
とし夜の汽車に乗る

⑮ 6

黄 373
39

夜の闇にひたりてすこし生くる世の休めるこ
としわれも眠らむ
夜の闇にひたりてすこし生くる世のやすめる
ごとしわれも眠らぬ

⑮ 7

黄 375
39

世のはての独木舟より淋しけれひとり乗る夜
の汽車の眠りは
世の果の独木舟より淋しけれ独り来る夜の汽
車の眠りは

⑮ 10

わが涙君が涙と流れあひ日ねもす降れる今日
の小雨か

黄 378
39

わが涙君が涙と流れあひてひねもす降れる今
日の小雨か

⑮ 14

黄 387
40

かにかくに独り寝るこそわびしけれかく思ひ
つつ彼れも寝ぬらむ
かにかくに独り寝るこそ淋しけれかく思ひつ
つ汝れもいぬらむ

⑮ 15

黄 394
41

もの云はぬ男となりぬ何ごとを思ひつづくと
云ふならねども
もの云はぬ男となりぬ何事を思ひつづくと云
ふにあらねど

⑮ 16

黄 392
41

古きことを忘れはてましかく思ひ番茶の殻を
ふつと吐き捨つ
古きこと忘れはてましかく思ひ番茶の殻をふ
つと吐き捨つ

⑯二首中一首

⑯ 2 は表記文字の異同

既発表歌と『黄昏』所収歌に見られる理由については、
編集時の誤記、誤写に起因する可能性の他に二つの可能性が考
えられる。編集者や添削者による改変がなされた既発表歌につ

いて当初詠んだ原形のまま歌稿に残されていた可能性、発表時に改変がなされなかった既発表歌について後年豊彦自身が改変を行った可能性である。既発表歌と『黄昏』所収歌の異同を比較すると④・7、⑩・15、⑬・19、⑬・20、⑮・4のように一文字のみ改変し時には歌意に少なからず変化が生じているもの、⑤・2、⑪・19のように使用されている語に大きな変更はないが歌意が変化しているもの、④・4、⑥・31や⑫・6、⑬・6のように中心となる語に変化はないが他の語に複数の改変があり歌意が変化しているもの等様々で、⑧・13のように『スバル』誌上で「石炭よりも寒き瞳」となっていたものが『黄昏』には「石炭よりも黒き瞳」とあり、より端的な表現になっているものもある。

『黄昏』所収歌選出に際し用いた豊彦の歌稿類は六種類あるという小牧のメモを第一章で紹介したが、今回遺族から提供されたNo.4やNo.6の断簡を見ると、新たに語を追加する、歌の一部に取り消し線を引き横に別の句を書き直すなど自選、書写作業中に豊彦が適宜改変を行っている痕跡を発見できる。豊彦の歌稿類と『黄昏』所収歌には漢字表記の異同、誤記や誤写に起因すると思しき異同はあるが、語順や語を意図的に改変したらしい異同は見当たらない。以上のことから、『黄昏』は豊彦のよき理解者であった小牧茂彦が豊彦の歌をほぼ原形のまま収録したもので、編集者や選者に改変された可能性のある既発表歌に対して他者の手による意図的な改変が施されていない歌ばかりであると結論付けられる。

三 豊彦の作歌活動

黄41・5では「彼の女」として④・4では「彼のをみな」と古語を用い、黄88・10で「七つ星火事見屋根の人影の黒きが上に」としているところを⑥・31では「ななつ星出水の町に舟うけて火を振るうへに」と、現実的な光景を避けて幻想的な光景を詠んだものに改変しており、東京新詩社の中心的存在であった与謝野晶子の影響を思わせる。既発表歌の改変が豊彦の意図によるものでなければ、『明星』掲載の歌ならば主宰の与謝野寛とその妻・晶子、『スバル』掲載の歌ならば編集に中心的な役割を負っていた江南文三ら新詩社社友の添削、助言に基づく可能性が考えられるが、いかなる経緯で、何者の影響により『黄昏』所収歌と既発表歌の異同が発生しているのかは豊彦の歌稿のさらなる調査を行い、詳しく考えることとしたい。

冒頭で豊彦と同一生年月日の石川啄木に言及し、豊彦が啄木と異なり生計を立てることを目的とした自作の売り込みに必死にならなかつたのは実家が裕福で生活が困窮していなかつたせいではないかと述べたが、考え得る別の理由として母親であるつ弥の実家・奥山家の堅実性を重視する家風を挙げておきたい。豊彦の母方祖父・奥山金剛（きんこう）と豊彦の母方曾祖父・奥山小一兵衛は下館藩家老として二宮尊徳の指導を受け藩の財政再建のため俸禄を返上して働き、幕末には下館信友講という互助組合に参加して時には無利子の借金をし、高い家格に反して節制した暮らしぶりであった。明治期に入ってから奥山金剛は篆刻家として知られ晩年は各地を旅して印を彫ったが、金剛の息子たちである豊彦の伯父や叔父もそれぞれ号を有して漢詩や

篆刻、和歌を得意としていた。金剛の孫世代にあたる豊彦の血縁者を見ても、新潟県柏崎市で高等女学校の教員をしていた豊彦の十歳下の弟・徹は十折という号で俳句を詠み^(二二)、母方従兄の奥山保は日本画を習い古研という号を持つなど韻文や絵画を得意とする者が複数いたが、いずれもそれを仕事にはせず他に職業を持っていた。豊彦も歌を愛しはしても生計を立てる手段としては考えず、賑やかに集まり遊興や文芸談義に熱中する東京新詩社での生活を若い学生時代の出来事として断ち切り仕事に励む人生を選んだのだろう。しかし、『黄昏』収録歌選出のために小牧が整理した歌稿だけでもNo.1からNo.6まであったことから、豊彦にとって生計を立てる手段として歌を選ばなかったことは作歌を止めることと同義でなかったのは明らかである。隠居後の目標に歌集刊行を掲げ、自選や補足作業、新たな作歌と歌稿の整理を続けていたのである。その豊彦の遺志を継いだ姚子と小牧茂彦により、『黄昏』が刊行されたのである。

おわりに

田村黄昏、本名豊彦の遺族が保管していた田村黄昏私家版歌集『黄昏』は、昭和十四年（一九三九）十一月の豊彦七回忌に際して刊行され、生前交流のあった人々に配布されたものである。遺族宅には同書草稿やメモ類、豊彦の歌稿の一部も残っている。『黄昏』の典拠となった豊彦の歌稿類は、豊彦が詠歌を世間に発表することがなくなっても若き日に発表した歌の自選や補足、書写、推敲作業だけでなく新たな作歌を続けてい

たことを裏付け、豊彦が生涯抱き続けた歌への情熱を物語る資料である。

『黄昏』所収歌を選出した小牧茂彦は、豊彦と小牧が第三高等学校に入學した明治三十六年（一九〇三）九月からの長い友人であり、第三高等学校時代は共に作歌に励んだ仲間である。豊彦の歌のよき評論家でもあった。その小牧が『黄昏』所収歌選出の経緯を記した原稿用紙により、歌集刊行を夢見てか豊彦が自作の選出を複数回行っていたことが判明した。『黄昏』所収の四百四十一首のうち未発表歌は全体の約56.9%にあたる二百五十一首で、既発表歌数を上回る。『明星』や『スバル』での既発表歌は『黄昏』所収歌との異同も多く、中にはほとんど原型を留めていない歌や歌意が大きく変化した歌もあるが、『黄昏』には他者による添削や改変がなされず豊彦が詠んだままの歌が収められていると考えられる。『黄昏』所収の歌は、未発表、既発表ともに長年の友人でありよき理解者であった小牧茂彦が意図的な改変を施さず豊彦の歌を選出、収録したものである。

『明星』『スバル』を中心に発表された歌と意図的な改変を施さず収録されたと考えられる『黄昏』所収歌を比較すると、前者は古風な表現や言い回しを用いる傾向がある。これは各誌を主宰しまたは編集を担当した与謝野夫妻や江南文三ら東京新詩社の特色であったのか、それとも発表当時の豊彦の歌風であったのか。『黄昏』所収歌と豊彦の既発表歌の異同を比較するだけでなく他の東京新詩社同人の歌稿と添削済みの歌の異同を併せて検証することにより、与謝野寛、晶子夫妻がいかなる方針に基づき弟子に歌を指導、添削していたのか、それを受けて与謝野門下の歌人たちは自己の歌をどのように変化させていた

のか明確になるが、これは今後の課題である。

豊彦の歌稿に残る推敲の跡と多数の未発表歌は、彼が歌の発表を止めてからも作歌への情熱を失わず歌集刊行を夢見ていたことの証左である。北原白秋や木下空太郎、佐藤春夫や堀口大文学のような著名作家、著名詩人となった新詩社社友がいる一方、豊彦は職業歌人としての道を選ばず会社勤めの傍ら作歌を継続していた。堅実を重んじる母親の実家の家風が影響して職業歌人の道を選ばなかったと考えられるが、下館藩家老であった豊彦の母方祖父・奥山金剛ら親族については別稿で詳述し、豊彦が職業歌人としての道を選ばず会社員として勤務する傍ら作歌を続けた理由について深く検討する。

さらなる課題として、豊彦が作歌を開始した時期の特定が挙げられる。小牧茂彦は「序に代へて」で豊彦が歌を詠み始めた時期を明治三十六年（一九〇三）九月の第三高等学校入学後ではないかとしているが、遺族が保管していた豊彦のノート類を見ると、明治三十五年（一九〇二）四月、大阪府立天王寺中学校五年生の時に記した旅行記『春雨日記』に豊彦による詠歌が複数含まれている。豊彦は小牧の推測より一年半以上早い中学校在学中の十五、六歳で既に歌を詠んでいたことになり、明治三十九年（一九〇六）春の新詩社入社時点での歌歴は四年以上となる。『春雨日記』の翻刻を行い、豊彦が歌を詠み始めた時期の特定と新詩社時代とは異なる最初期の歌風を分析する予定である。

〔注〕

（一）菅原杜子雄編『万造寺奇選集』第9巻（昭和三十九年）（一九

六四）九月謙光社）収録、堀口大学による序文「万造寺奇を思う」より引用。

（二）令和五年（二〇二三）九月京都女子大学文学部『女子大国文』第百七十三号掲載。

（三）令和五年（二〇二三）九月京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学国文学論叢』第四十九巻掲載の拙稿「与謝野門下新詩社男性歌人による愛児の歌——田村黄昏、万造寺奇の歌集から——」において、田村黄昏、万造寺奇による我が子をテーマにした歌を論じている。

（四）『我等』に掲載された二首は本名の田村豊彦名義である。

（五）第三高等学校編『第三高等学校一覽 明治三十五年九月起三十八年八月止』（明治三十六年）（一九〇三）十一月第三高等学校）参照。

（六）第三高等学校編『第三高等学校一覽 明治三十七年九月起三十八年八月止』（明治三十八年）（一九〇五）一月第三高等学校）参照。

（七）『第三高等学校一覽 明治四十年九月起四十一年八月止』（明治四十年）（一九〇七）十二月第三高等学校）に、明治三十九年（一九〇六）七月大学予科第一部法科卒業生として豊彦の名前がある。

（八）前掲注（七）同書に、明治四十年（一九〇七）七月大学予科第一部文科卒業生として小牧茂彦の名がある。

（九）東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従明治四十年至明治四十二年』（明治四十年）（一九〇七）十二月東京帝国大学）掲載の「学生生徒姓名（明治四十年九月末現在）」に、法科大学政治学科第一回受験生として両者の名前がある。

（十）東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従明治四十四年至明治四

十五年』(明治四十四年(一九一)十二月東京帝国大学) 参照。

- (十二) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従明治四十一年至明治四十二年』(明治四十一年(一九〇八)十二月東京帝国大学) 参照。

- (十三) 東京帝国大学編『東京帝国大学一覽 従大正二年至大正三年』(大正三年(一九一四)一月東京帝国大学) 参照。

- (十三) この絵葉書には消印や署名、日付がないが、「明日は弟厚彦の一年祭」との文言がある。小牧の弟厚彦は明治三十八年(一九〇五)八月九日の乗鞍岳大量遭難事故で死亡していることから、小牧茂彦が明治三十九年(一九〇六)八月八日に書いたと推定される。

- (十四) 本文掲『新万葉集』第五卷より引用。

- (十五) 原田登編『帝国大学出身身録』(大正十一年(一九二二)四月帝国大学出身身録編集所) には「田村豊彦 大阪府西成郡玉出町五六二ノ五ノ君は明治十九年大阪府西成郡玉出町に生る大正元年東京帝国大学法学部経済学科を卒業し大正五年九月大阪織物株式会社に入社し今日に至る」と生まれた月の記載がなく、大阪府西成郡玉出町生まれとしている。だが、豊彦の父・典瑞は豊彦が誕生した明治十九年(一八八六)前後に鹿児島で勤務していたことから、豊彦は大阪、東京のどちらでもなく鹿児島で生まれた可能性が高い。

- (十六) 原稿用紙は小牧の特注品らしく、原稿用紙のマス目の外に「小牧用箋」と小さく印字されている。筆跡と小牧用箋の印字から、「選の経過説明」は小牧茂彦が記したものとみてよい。

- (十七) 口絵の豊彦肖像に直筆色紙の筆跡で添えられているが本文に収録されていない未発表歌「杯をふくみて見たるあめつちのおほ

らかなるを忘れかねつゝ」も含めると、四百四十二首である。

- (十八) 年毎に収録されている未発表歌数を作歌数で除して100を乗じ、小教第二位以下は四捨五入している。

- (十九) 『明星』午年第五号(明治三十九年(一九〇六)五月東京新詩社) 誌上に「爾後本社同人に加盟せるは、中島清(東京) 田村豊彦(大阪) の二人なり」と報告されている。『与謝野寛短歌全集』(昭和八年(一九三三)二月明治書院) 下巻所収「与謝野寛年譜」では、明治三十六年(一九〇三)の項に「藤岡長和・田村豊彦・渡邊湖畔・白仁秋津の諸君、新詩社同人となる」とあるが、明治三十八年(一九〇五)までの『明星』に田村黄昏の作品も名前も登場しないことから、豊彦の東京新詩社入社を明治三十六年(一九〇三)としている「与謝野寛年譜」は誤りで明治三十九年(一九〇六)が正しいと考えられる。

- (二十) 遺族提供の戸籍謄本に豊彦の母は奥山金剛の長女とあり、豊彦の母方祖父が奥山金剛と判明している。豊彦の母方伯父は奥山麓、奥山正路、母方叔父は有田兎毛三であるが、奥山金剛をはじめとする豊彦の母方親族については、別稿で詳しく説明する。
- (二十一) 豊彦の遺族宅に十折名義の俳句が記された短冊がある他、邨田聴泉『聴泉古稀集』(昭和十五年(一九四〇)九月村田六太夫刊) に、昭和三年(一九二九)五月六日に開催された和歌俳句の雅会参加者として柏崎女学校の田村十折の名が記されている。

〔付記〕

引用文は現行の字体を用い、斜線で改行を表し、適宜ルビを省き明らかな誤りは改めた。『黄昏』や豊彦の歌稿、小牧茂彦の草稿を提供してくださった豊彦の遺族には深く感謝申し上げます。

なお、本稿完成後、藤岡長和が発行していた『敷島』にも豊彦の寄稿があることが判明した。『敷島』の調査も今後の課題である。

(みやもと わかこ・京都女子大学非常勤講師)